

# 万葉集の涙

桑川光樹

53

古代の日本人たちは、どのような時に涙を流したであろうか。本稿では、万葉集を資料としてこの問題を考察してみようと思うのであるが、もちろん、万葉集は歌集であるから、そこにあらわれる涙の質と量とをもってただちに古代人一般の感情生活をおしはかるわけにはいかない。たとえば、万葉集では、女の涙よりも男のそれが件数として圧倒的に多く、また恋愛に関する涙がこれも件数として他を大きくしのいでいるが、だからといって、古代では男がいつも恋の涙にくれていた、と結論づけることはできないであろう。もともと万葉歌の作者としては女よりも男が多く、歌の内容では恋愛にかかわるものが大きな部分を占めているのであって、万葉集自体が、総体として、当時の人々の感情生活の一部をしか反映していないという事実を、念頭に置く必要がある。あわせれば巨大な量におよぶはずの、古代人の涙は、文学とはかかわりのないところで流れ消え去ったはずなのである。したがって、本稿はあくまでも文学論の範囲にとどまるものであることを、まずことわっておきたい。

次に、考察の方法に関係することであるので、私の関心のありようを、もう少し説明しておかなければならない。山部赤人が「神岳

に登りて」作った長歌の一節、

明日香の旧き京師は……見るごとに哭のみし泣かゆ古思へば（三  
—三二四）

は、日本の文学で、懐古の情が、はっきりと「泣く」ということばと結びついてあらわれる最初の例であるが——そしてこの感情の实质は前代の人麻呂の「阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らぬやも古思ふに」（一一四六）や「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ」（三一—二六六）などへと容易にさかのぼることができ、——外的刺激に対する物理的反応でなく、このような、いわば情調や観念やに媒介された涙が文学に登場してくる、その経過を跡づければどういふ結果になるであろうか。つまり「涙」を文学史の流れの中に位置づけよう、というのが本稿のねらいなのである。

このような立場で万葉集を見ると、目録・題詞・左注の中にあられる「涙」は、歌自体の中にあられるそれと、区別して考えることが必要になってくる。たとえば、巻一六の三八一一—一三の歌は悲恋の娘子が死に瀕して歌うというおもむきであるが、それが「涙」をともなったということは、ただ左注の「歎歎流涕して、こ

の歌を口号くごうみ」云々によって知られるばかりである。『私注』に「後文に由縁が付けられてあるが、歌の趣は勿論臨終の娘子の作ではない。悲恋に痛み病む娘子等の心情を、娘子の立場から表現した民謡の一体といふべきで」あるとされているような成立事情を考えるとすれば、この「涙」は後人の「解釈」から生まれたものであって、歌そのものに本来内在するものとは言い切れなくなってくる。

そこで、私はまず歌そのものにあらわれる涙を考えてみようと思う。ナク（泣・哭・奈久）、ネ（泣・哭）、ナミダ（泣・涙・涕・滂・那美多）、ソデヒツ（袂漬）、衣の袖は乾る時もなし、など「泣く」ことに直接関連のある語句をふくむ歌をもらさずひろい、たとえば一首の中に二件の涙をふくむものを二首として処理すると、九十九首の歌が浮かびあがる。これには、「……泣く子なす慕ひ来まして」（三一四六〇）や「……情のみ咽せつつあるに」（四一五四六）のように、比喩の性格が強くと、直接の涙をとまなわないと判断できるものは除外してあるが、「懸けて懸けて勿泣かしそね」（一六一三八七八）のように、禁止表現ではあっても可能性として「泣く」ことを前提としているものは含めてある。

いま、それらの例を列挙する煩雑は避けたいが、統計的に観察されるいくつかの特質をはじめに報告しておく。偶然にも例数が約百例であるから、出てくる数字はほぼパーセンテージに一致する。(A)泣く主体Ⅱ男四、女二八（「妻子ども」の妻をふくむ）、子供九（「妻子ども」の子をふくむ）、男女共通または男女不明一九、

また、主体が一人称（われ）であることが明瞭なもの六八。(B)泣く理由Ⅱ①恋愛・夫婦関係五九（隔てられている二九、生別に際して一五、死別に際して一五）、②肉親・知人関係二一（隔てられている三、生別に際して五、死別に際して一三）③比喩的五、④その他一七。——以上が数的分類の結果であるが、次に、これらを作者別年代順に配列してみても観察される特質のいくつかを記しておきたい。

「山科の御陵より退き散ちぢくる時」の額田王の長歌（二一一五五）の、

……哭のみを泣きつつ在りてや 百磯城の大宮人は去き別れなむ  
は、集中最も古い涙の表現であるが、天皇の死に対する作者の悲しみは、大宮人の客観描写に媒介されることによって格調を高めていると言えるであろう。また、同じ作者の晩年の歌、

古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如（二一一一）  
二）

の「鳴きし」は、作者の「泣く」をかけていると考えることが可能であろうが、そこまでくみとって理解すれば、私たちはすでにここに、赤人の懐旧の涙の先蹤を見出すことになるのである。

泣血哀慟歌を作った柿本人麻呂は、意外にも、あまり「涙」を詠んでいない。歌集の二首（二八四九、二八五七）を別にして人麻呂作歌を対象とすれば、二一〇番および二一三番歌にそれぞれ「みどり児の乞ひ泣く毎に」とあり、四九八番歌に「古の人そまさりて哭にさへ泣きし」とあり、一三五番長歌の末尾に、

……大夫と思へるわれも敷袴の衣の袖は通りて濡れぬ

とあるのがその例のすべてである。一三五番歌の場合は、マストラと涙とを—もちろん逆接的にだが—組みあわせた、集中数少ない例であり、同種のもは、もう一首、大伴旅人の九六八番歌に見られるだけである。(四一六二七番歌の「恋水」をナミダとよむ説によればもう一例加わることになるが、今は「恋水」をヲチミツとよむ説に従う。)つまり人麻呂の場合、みどり子を別とすれば、涙はずべて妹を恋するそれである。人麻呂における過去志向の強さは、さきにも挙げた阿騎の野に宿る旅人打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに(一一四六)や「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ」(三一二六六)やにも端的にあらわれており、とりわけ後者の例では千鳥の『鳴く』のが、詩的連想として、「情もしのに」『泣く』人の姿につらなりはするが、しかしなお、それらは直接には、泣くこと、涙することに結びつけられていないのである。

次に、憶良の場合を見る。ここでまず目立つ特徴は、「涙」の仮構(フィクション)的性格ということである。宴を罷る歌(三十三三七)の「子哭くらむ」は写実というよりは罷宴の理由として観念的に設定された状況であるし、日本挽歌の反歌(五—四九八)の「わが泣く涙」も、ここに詠まれている女性を旅人の妻であるとする立場に立てば、やはり観念的・仮構の性格が指摘せられるであろう。七夕の歌(八一—一五二〇)の「涙は尽きぬ」の主体は牽牛であり、貧窮問答歌の「妻子どもは吟び泣くらむ」は「我よりも貧しき人」の場合を想定したものである。必ずしも「実感」をたてまつるつも

はないが、その涙に、呑み得ぬ実感の重みがこめられているのは、結局、残る二首(老身重病の歌、五—八九七およびその反歌八九八)の「……かにかくに思ひわづらひ哭のみし泣かゆ」「慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の哭のみし泣かゆ」に限られるのである。ところでこの最後の例は、先にあげた額田王の、「古に恋ふらむ鳥は……」(二—一一二)、および人麻呂の「……夕波千鳥汝が鳴けば……」(三一—二六六)と比較するとき、興味ある相違を提供している。これらの歌では鳥が鳴くことに実体的な意味があり、それがわずかに「泣く」ことを暗示するのであったけれども、この憶良の歌の場合、それを長歌の末尾と重ねあわせれば十分に明らかであるように、「雲隠り鳴き行く鳥の」は、ほとんどただ「哭のみし泣かゆ」をひき出すために置かれているわけである。もちろん「雲隠り鳴き行く」ところに晩年悲哀の暗喩はこめられているにせよ、一首の力点は「哭のみし泣かゆ」にあるとすべきであろう。以上を要するに、憶良の涙は、より観念的・仮構的であると同時に、その涙を強調する姿勢が強まっているとも言えるのである。

旅人の場合はどうかであろうか。その四例中三例までは、失なった妻を思つての涙である。

橘の花散る里の霍公鳥片恋しつ々鳴く日しそ多き(八一—一四七三)

妹と来し敏馬の崎を還るさに独りして見れば涙ぐましも(三一—四四九)

吾妹子が植系し梅の樹見ることこころ咽せつ々涙し流る(三一—

## 四五三)

第一例は、旅人の妻大伴郎女の喪を弔うために大宰府に派遣された勅使石上堅魚の「霍公鳥来鳴き響もす卯の花の共にや来しと間はましものを」の歌に「和ふる」旅人の歌であって、妻を失った境涯をホトトギスに託したものであるから、この「鳴く」は実質的には「泣く」を意味している。この歌は、ふたたび引けば額田王の「古に恋ふらむ鳥は霍公鳥……」(二一一—二二)と共通するところが大きい。一、二番歌ではホトトギスと「われ」とが並列的に対置されており、「鳴く」はほとんどホトトギスの文脈のみかかわっているのにくらべて、この旅人の歌ではホトトギスと「われ」とが重ねられて一体化し、「鳴く」がそのまま「泣く」ことを表現しているところに、文芸意識の変化なり進展なりを見出すことができるのである。

第二例第三例では、時間の流れの中で不変のものと変化するものとの対比がおこなわれ、その不条理の認識において、涙が流されているのである。それは、状況や素材の相違を捨象して言えば、かつて人麻呂が近江荒都に寄せた心情と同種の性格を有している。そしてそのように大きく括って言うならば、この旅人の二首は、この種の心情が「涙」と結びついた最初の例とすべきであろう。

旅人の、もうひとつの用例は、すでに人麻呂の項で触れた、大夫と思へるわれや水茎の水城の上に涙拭はむ(六一—九六八)で、遊行女婦児島の歌にこたえたものである。以上四例、要するに旅人の涙は、すべて人を恋うることを機縁として流されたのであつ

た。

大伴坂上郎女には三例の涙がある。その一は、尼理願の死を悲しんだ卷三の四六〇番歌であり、その二は、足遠のいた男への怨恨の歌(四一六一—一九)であり、その三は、娘の坂上大嬢を思う歌(四一七二—三)である。最後の例には文飾が感じられるけれども、三例ともいわば直情的な涙であって、情調や観念による屈折や浄化の傾向は希薄である。

赤人の用例はただひとつしかない。本稿のはじめに挙げた「……：見ること泣のみ泣かゆ古思へば」(三三—三四)がそれである。赤人の「古」については詳しい論考を要すると思うが、それは別稿にゆずることとして今は先に進むことにしたい。

集中、涙の件数の最も多いのは大伴家持であって十一例を数える。そしてその「泣く」主体を見ると六例までは第三者である。すなわち、舍人(三一—四七五)、若き兒ども(一七一—三九六二)、雉(擬人化、一九—四一四八)、母・妻(二〇—四三九八)、父(二〇—四四〇八)、妻子(同上)となっている。たとえば三九六二番歌を例にとれば、それは「忽に枉疾に沈み、殆に泉路に臨む。よりにて歌詞を作りて、悲緒を申ぶる一首」という題詞をもち、歌の末尾は「たまきはる命惜しけど為むすべのたどきを知らにかくしてや荒し男すらに嘆き臥せらむ」で結ばれるものであるが、「涙」はこの感情には直接にかかわるものでなく、家で自分を待っている子どもたちを「彼此に騒ぎ泣くらむ」と推量しているのであって、憶良の「宴を罷る歌」の場合と同質のものである。他の五例を吟味しても

ほぼ同様のことが言えると思うが、これら、第三者を主体とする涙の場合、いずれもそこに観念的・仮構の性格を見ることができるところである。ところで、残る五例はその主体が明確に「われ」であるか、あるいは「われ」と推定できるものであるが、そのうち「悲傷亡妾」を内容とする。

妹が見し屋前に花咲き時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに (三一四六九)

は、旅人の四五三番歌「吾妹子が植多し梅の樹見るごと」と類似した歌境を示している。ただし、旅人の歌が亡妻への涙を強調しているのに対して、家持のそれは、より強く「時は経ぬ」の詠歎を前面に押し出しているのであって、この相違はやはり見落しがたいものであろう。

だが、さらに注目すべきは、巻十九の四一六〇番「世間の無常を悲しぶる歌」である。いま煩を厭わず全文を引こう。

天地の遠き始めよ 世の中は常無きものと 語り継ぎ ながら来れ 天の原ふり放け見れば 照る月も 満ちかけしけり  
あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにほひ 秋づけば  
露霜負ひて 風交へ 黄葉散りけり うつせみも かくのみならし 紅の 色も移ろひ ぬばたまの黒髪変り 朝の咲み ゆふべ  
変らひ 吹く風の 見えぬが如く 逝く水の 留らぬ如く 常も  
無く 移ろふ見れば にはたづみ流るる涙 止みかねつとも

ここには、父旅人の、たとえばあの讃酒歌に見られる世間無常の観念が流れこんでいるのを見ることができよう。また、より直接的に

は憶良の「世間の住り難きを哀しぶる歌」(五一八〇四)の影響を言うべきだろう。また同じ憶良の、巻五巻頭に近い漢詩

蓋し聞く、四生の起滅は夢の皆空しきがごとく、……紅顔は三従と長に逝き、素質は四徳と永に滅ぶ。何ぞ、偕老の要期に違ひ、独飛して半路に生かむといふことを図らむ。蘭室に屏風徒らに張りて、断腸の哀しび彌痛く、枕頭に明鏡空しく懸りて、染鴛の涙遼落つ。(以下略)

もおそらくその下敷きとなったであろう。そして今、「涙」を中心にして言うならば、こうした「世間無常」の意識なり観念なりは、家持によってはじめて、和歌において「涙」と結合されたのであった。

以上、私は万葉集の歌そのものに見られる涙を、主要作者の順に従って吟味してきた。

次に、目録・題詞・左注・漢詩文(以下まとめて「詞」と言う)について考えてみたい。歌の中に泣くことの表現を持ち、詞の中にもそれに対応する表現を持っている例は、全体で八例(一七七一―七八、四六〇、四七〇、四七四、六九〇、七九八、一八〇四、四〇〇八、四一六〇)あり、そこに見られる関連字句は、慟傷、悲嘆、悲緒、悲別、涙、哀死、悲である。そこでこれらの字句を、一般に涙と関係あるものと認め、これらの字句やそれに類するもの、および「歎歎」「哀咽」などあきらかに涙を表現している文字をふくむ詞の例を集中にさがすと、件数にして七十三例を得るのである。このことは言いかえれば、前述の八例をのぞく六十五例のものは歌の中には涙の表現を持たず、ただ詞によってのみその事実を示してい

ることを意味している。

詞の中には、歌の作者自身によるものもあり、古い伝承もあり、また編者による加筆や陳述もふくまれていると考えられる。したがって本来ならば、それらの例ひとつひとつを歌の成立との関係において考察しなければならぬのであるが、個々の筆者を特定することができない現在において私たちに可能なのは、それらを万葉集の最終編纂時を下限とする「万葉時代」の、ある意識の反映として、等しなみに扱うことであろう。詞は、その歌の作者によるものであれ、第三者によるものであれ、いずれも何らかの「事実」に対する「解釈」であると考えてよい。そしてその解釈は、ある種の批評意識や物語意識、広義の文芸意識を伴っていると言えるであろう。以下、このような観点に立って七十三例の素材を検討してみようと思う。

涙の原因は、死別(21)、生別(18)、自傷(6)、同情(10)、措昔・無常(10)、旅苦(7)、病苦(1)、に大別される。(カッコ内は件数)。原因ごとに分け、作品の成立年代順(沢鴻・森本編「作者別年代順万葉集」による)に見て行くと、次のようになる。

(A) 死別

約半数の11件は、亡妻悲傷ないしその類である。すなわち、

\* 二一〇七題詞「泣血哀慟」人麻呂

\* 一六一三七八六題詞「哀慟血泣」壯士

\* 一六一三七八八題詞「哀頽之至」壯士

\* 五一一七九四前漢文「斷腸之哀」「染筠之淚」旅人(憶良)

\* 五一一七九三前漢文「崩心之悲」「斷腸之泣」旅人

三一四七〇題詞「悲緒未息」家持

三一四六二題詞「悲傷亡妾」家持

三一四六五題詞「悲嘆秋風」家持

一五一三六二六左注「悽愴亡妻」丹比大夫

三一四八一題詞「悲傷死妻」高橋朝臣

一九一四二三六「悲傷死妻」未詳

であるが、\*印をつけたものは、いずれも「遊仙窟」に類句を見出すことができ、それからの影響が考えられるものである。

他の10例中6例までは、兄弟など肉親との死別である(二一一六五題詞「哀傷」大来皇女、二一一六六左注「感傷哀咽」同、二一二〇三題詞「悲傷流涕」穗積皇子、一六一三八六九左注「妻子之傷」志賀白水郎の妻子、一七一三九五七題詞「哀傷」左注「感傷」家持、九一一八〇四題詞「哀弟死去」福麻呂)。

残る四例は、三一四二三題詞「哀傷」山前王、二一一七題詞「慟傷」日並皇子舍人等、三一四五九左注「悲慟」縣犬養宿祢人上、である。

(B) 生別

(1) 一六一三八〇四番歌 まず題詞と歌とを引く――。

昔者壯士ありき。新たに婚禮を成せり。幾時も経ずして、忽に駅使となりて遠き境に遣さゆ。公事限有り、会期日無し。ここに娘子、感慟悽愴してやまひに沈み臥りき。年を累ねて後に、壯士還り来りて、覆命既に了りぬ。すなわち詣りて相視るに、娘子の姿容の疲

羸甚な異にして、言語哽咽せり。時に、壮士哀嘆し涙を流し、歌を裁りて口号くちまきみき。其の歌一首

かくのみにありけるものを猪名川の沖を深めてわが思へりける  
右は相愛の男女が生き別れることよって流す涙の一件であるが、  
娘子のそれが直接、夫と離れてあることによるものであるのに対し  
て、壮士の涙はより多く、時間のもたらす齟齬や変容への悔みに原  
因している。とくに、歌をも組み入れて考えた場合、それは古事記  
の多遲摩毛理や赤猪子の伝説の骨格と異なるものではないことが指  
摘できるであろう。

## (2) 大伴旅人の周辺

四一五七八題詞「悲別」大伴三依

四一六九〇題詞「悲別」大伴三依

四一五七六題詞「悲嘆」葛井大成

四一五六七左注「悲別」山口若麻呂

たとえば三依の

照らす日を闇に見なして泣く涙衣濡らしつ干す人無しに

に見られるように、「悲別」の涙は「照らす日を闇に見なして」と  
いう観念的・知的次元でとらえられている。また、遊行女婦児嶋に  
関する

ここに娘子、此の別るることの易きことを傷み、彼の会ふことの  
難きことを嘆き、涕を拭ひて、みずから袖を振る歌を吟ふ。

という左注(六一九六六)を見ても、生きての別離がひとつの文学  
的テーマとして固定している(しつ々ある?)ことが感じられる。

もちろん、ここにも遊仙窟の影は濃い。

## (3) 大伴家持とその周辺

家持が任地越中を離れるにあたって人々とりかわした別離の歌  
には、多く涙が伴っている。

京に入らむとき漸く近づき、悲情撥き難く、懷を述ぶる一首(一  
七―四〇〇六題詞)の「悲情」は、その短歌に「わが背子は」云々  
とある如く、池主との別離の悲情を主想としており、それに答えた  
池主の、

……生別の悲しびの腸を断つこと萬廻なり。怨緒うらな禁め難し。(一  
七―四〇〇八題詞)

の「怨緒」は、その長歌の「哭のみし泣かゆ」に対応している。また、  
ここに旧きに別るる懷、心中に鬱結す。涕を拭ふ袖は、何を以ち  
てか能く早かむ。……(一九―四二四八題詞)

など、いずれも別離の涙が文芸的・趣味的に扱われていることが知  
られる。

## (4) 弟上娘子と中臣宅守

題詞にはないが、目録では

中臣朝臣宅守娶藏部女孀狭野弟上娘子之時勅断流罪配越前国也於  
是夫婦相嘆易別離会各陳慟情贈答歌六十三首(一五―三七二三)  
となっており、少なくとも目録では、この二人の事件は、以上見て  
きたものと同様のワク組みで扱われていると言えるだろう。

## (5) その他

一六一―三八一三左注「……娘子係恋傷心沈臥痾疥 瘦羸日異忽臨

泉路 於是遣使喚其夫君来 而乃歎歎流涕口号斯歌……車持氏  
娘子

一六一三八五七左注「哽咽歎歎高声吟詠此歌」佐為王の近習婢

二〇一四四八二左注「悲別」藤原執弓

二〇一四四九一左注「薄愛離別悲恨」石川女郎

(C) 自傷

二一四一題詞「有間皇子自傷結松枝」歌」

一一二四題詞「麻統王聞之感傷和歌」

三一四一六題詞「大津皇女被死時誓余池陂流涕御作歌」

すべて受刑者の立場を語っているが、いずれも題詞は短かく、説話化の傾向は見られない。

(D) 同情

全十例中四例(三一四一五、三一四二六、二一二二八、三三四三

四)は行路死人歌であり、他の三例(一一二三、二一一四三、三三四四二)は、流刑、刑死、自経などへの同情である。ここでも題詞は短かく、文芸化の意識はとぼしいと言えよう。

(E) 愛惜・懐旧・無常

懐旧の涙六例中五例までは旧都を想ってのものである。すなわち「近江」一例(一一三二題詞高市古人)、「寧楽」三例(八一六一〇四題詞大原今城、六一一〇四四題詞作者未詳、六一一〇四七題詞福麻呂)、「久邇」一例(六一一〇五九題詞福麻呂)がそれであるが、とりわけ一〇四四、一〇五九、一六〇四の三首の題詞には「荒墟」への悲傷であることが明示されている。

徳良の「土あまやも空しかるべき万代に語り続くべき名は立てずして」(六一九七八)の歌の左注「……於是徳良臣、報語已畢、有須拭涕悲嘆……」の涙は、「空し」くあることへの無念、諦念のそれであろう。

作者未詳卷十の一八八四、一八八五番歌の題詞は最も短かく「歎旧」とあるだけであるが、一八八五番歌の「人は旧きし宜しかるべし」という内容との間には一種の矛盾がある。題詞筆者の目は、「年月は新なれども人は旧りゆく」という一八八四番歌の方に主として注がれていたと思われる。

題詞の中に「悲」と結びついて「無常」の文字があらわれるのは、さきあげた家持の「悲世間無常歌」(一九一四一六〇)および、同じく家持の「臥病悲無常欲修道作歌」(二〇一四四六八)だけである。

(F)(G)としてあげるべき旅や病苦の涙については、すでに紙面もつきたので省略する。以上、資料の分類に終始したが、詞の中の涙が、歌そのものの中の涙よりも範囲をひろげ、振幅を大きくしつつ、文芸化の方向に進んでいった、その経緯の一端は眺めることができたと思う。

〔注〕本稿は、私が一九七三年九月末ごろ、一部の地方紙に『万葉人の涙』と題して掲載した随筆文と内容的に重なる部分があるが、新聞掲載のものは短い随想であったので、今回は資料的にも方法的にもその後の考えを入れ、あらためて文学の問題として考えようとするのである。